

金沢学入門2

2010年度期末定期試験問題

問 昨年4月から今日までの金沢での暮らしの中で、きみたちは、いろいろなものを見て、食べて、きいて、さわって、そして感じたことと思う。そんなさまざまな経験をとおり、この地の風土について考えただろうと思う。

では、この期間に、どんなものを見て、食べて、きいて、さわって、そして感じたか。そのいずれか、あるいは複数の経験にもとづいて何を考えたか。この授業の主題あるいは個々の授業で得た知識や情報と考えあわせながら、自分なりに描くことのできた金沢像を小論文形式で解答用紙に1ページ以内にまとめなさい。

授業の主題

かつては加賀百万石の文化が栄えた地として、いまは文化資産を活かした観光都市としてまた北陸の経済の中心として金沢は知られる。しかし、金沢を特徴づけるのは文化ばかりではない。金沢には豊かで変化に富んだ気候があり自然がある。このような風土があつてこそはぐくまれた金沢の文化であるともいえる。

そこでこの授業では、風土と文化との密接なかかわりを金沢という地で学び考えることを主題としたい。この目的にそつて、それぞれの担当者が自然科学のそれぞれの専門の立場から、しかし、それぞれに話題を連携させながらこの授業全体を進めていく。

前半の地質や地形、火山、化石、そして日本海についての話題では、金沢という地を自然のおおきな枠組みの中で位置づけることになる。ひきつづいての動物や植生、海の生物の話はこの地をとりまく身近な自然のいとなみの理解を助けるはずだ。

後半の話題は、冬の大雪や春の黄砂という大気現象ではじまる。金沢に暮らしているからにはこの地を特徴づける天候は理解しておくべきものといえる。その後はさまざまな自然の中でいとなまれてきた金沢での伝統的なまちづくりやその対極にある現代的な土木建造物の建設、さらに街の開発の負の側面としての大気汚染や自然災害の現状と対策について言及する。

そして、この授業の最後には、これらを総括しての北陸の風土と金沢人の気質について考える材料を提供する。

自然科学のさまざまな視点から金沢の風土をまず学び考えたいうえで、金沢の文化を自分なりにとらえてもらいたい。そして、それぞれに自分なりの金沢像をみつけてもらいたいものと思う。